



く り おお や 大田市久利・大屋地区

人口も面積も異なる二つの地区が
お互いに補い合っ生まれる新しい取組

2地区連携
5年計画で
取り組み中!

大田市街と石見銀山との中間に位置する両地区。規模の異なる二つの地区が、今までの取組をお互いに補い合いながら、地域を継続していくための新しい計画が動き出しました。各地区で抱える課題を、より効率的・効果的な手法で解決する仕組みを確立するとともに、担い手の確保につなげ、「久利・大屋地区の住民が、住み慣れた地域で今後も安心して住み続けることができるまち」を目指します。



Background これまでの地区のあゆみ

	久利地区	大屋地区	
H4	小学校合併 / 久利小学校と大屋小学校が合併し、久利地区内に「久屋小学校」が誕生		H4
H21	久利まちづくりセンター・大屋まちづくりセンターが開設 地域の課題解決に向けた自主的な取組を支援するとともに、市民と行政の協働により地域の活性化に向けたまちづくりの推進を図るため、各地区にまちづくりセンターが設置される		H21
	「大屋まちづくり推進委員会」を設立 地域内外との交流も兼ねた伝統文化芸能・歴史の継承や、道路沿いの花壇作り・除草作業などの環境美化を中心とした地域活動を実施		
H24	「久利まちづくり推進協議会」を設立 住民主体の地域運営組織として、防災対策、地域交通対策、健康づくり・福祉事業等、地域課題解決のため幅広い取組を展開		
H31	デマンド型自治会輸送の運行開始 久利まちづくり推進協議会において、地区住民を対象に自治会輸送の取組を開始		
R2	草刈り等ボランティア「手ごし隊」を結成 草刈り・除雪等高齢者の生活支援のための住民ボランティアとして取組を開始		
	大屋地区バス路線の廃止 地区内唯一の公共交通機関であったバス路線が令和3年3月末をもって廃止となる		R3.3
R3.4	両地区共同によるデマンド型自治会輸送の運行を開始 / 久利地区で取り組んでいた自治会輸送のエリアを大屋地区まで拡大		R3.4
R3.8	「久利・大屋地区小さな拠点推進協議会」を設立		R3.8



Data

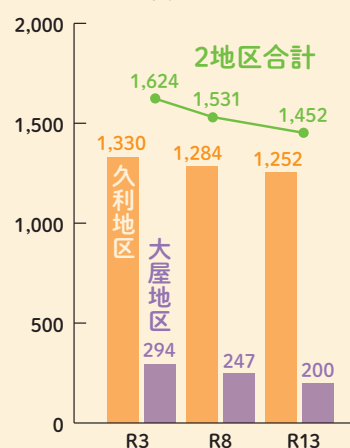
久利地区 人口 1,330人
(高齢化率 38.7%)

大屋地区 人口 294人
(高齢化率 60.5%)

○ 地域の特徴

- ・久利地区には、市道久利まちなみ線沿いに診療所、学校などの施設が集まっている
- ・大屋地区には、主要施設が乏しく、公共交通機関もない

10年後の人口予測



Step 小さな拠点づくりのステップ

step.1 共有

両地区の住民同士で話し合っ

久利地区・大屋地区は、以前から学校を通じたつながりの強い地域でもありましたが、大きなきっかけとなったのは大屋地区内のバス路線の廃止でした。移動手段の確保に向けた話し合いを重ねる中、交通の取組だけでなく、両地区が抱える様々な課題に連携して取り組むことで、地域を継続していく新たな道筋が生まれるのではと考え、「久利まちづくり推進協議会」・「大屋まちづくり推進委員会」の両メンバーでの話し合いがスタート。両地区の現状・課題に対し、様々な意見交換を行いました。PTAや消防団など若い世代を交えた議論の場では、特に子どもの居場所づくりに関する課題が多く寄せられました。



step.2 計画

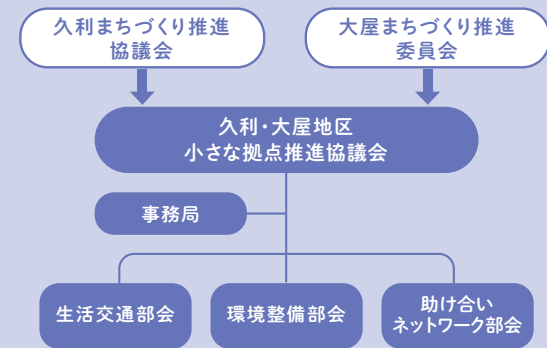
3つの柱で具体策を検討

話し合った課題に対し、両地区で連携して取り組めそうな事柄について対応策を検討していき、「①生活交通の確保」、「②生活支援の環境整備」、「③助け合いネットワークの構築」の3つの柱で事業を進めていくことにしました。

step.3 体制

課題解決のため両地区合同の推進組織を設立

取組を実行するための推進体制について、両地区の住民同士で話し合いを重ねました。令和3年8月には、各地区からそれぞれ役員を選出し、「久利・大屋地区小さな拠点推進協議会」を設立。事業を推進するために、協議会内に3つの部会をつくり、具体的な検討及び実践活動を進めていくことにしました。



step.4 実践

まずはできるところから考えて、やってみる

まずは、久利地区で既に取り組んできたデマンド型自治会輸送を大屋地区にも拡大し、両地区の住民がより利用しやすい形で実施することに。また住民の防災意識の向上を目的とした両地区合同防災研修会の実施や、草刈り等のボランティア組織による取組もスタート。「両地区が連携することで、お互いにとってのメリットとなり得る取組を進めていきたい」という思いで、できることから少しずつ動き出しています。



step.5 発展

持続可能な地域づくりを目指して

これらの取組を今後も継続していくために、推進組織の法人化や地域の拠点となる施設整備も予定しています。補助金だけに頼るのではなく、特産品の販売など、地域で稼ぐ仕組みも考えながら、持続可能な地域づくりを目指しています。



私たちのやり方

Our Project

取組 1

住民の移動手段の確保 両地区共同で取り組む 「デマンド型自治会輸送」



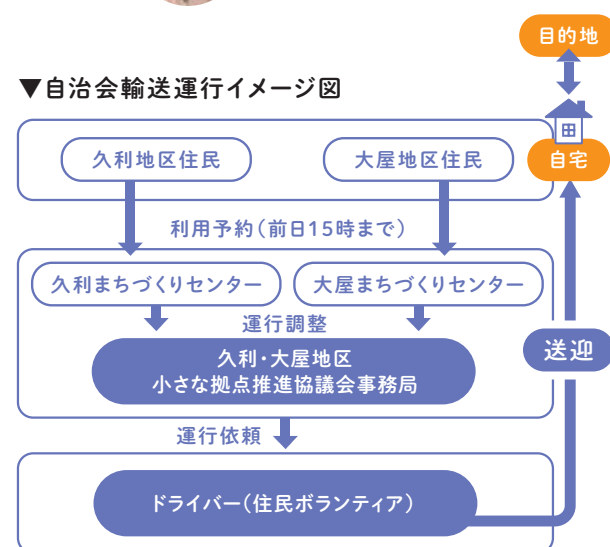
令和3年4月より、久利地区で既に実施していた自治会輸送を、大屋地区にも拡大し、両地区共同での自治会輸送が始まりました。両地区内の障がい者や75歳以上の高齢者、自家用車を所有していない等条件を満たす住民を対象に週4回、事前予約制により自宅から目的地までの送迎を行います。「久利・大屋地区小さな拠点推進協議会」が運行窓口となり、運転手は両地区から募った住民ボランティアが担っています。

まちの人の声



通院と買い物に行く時に利用しています。家の前まで送迎してもらえるのでありがたいです。

▼自治会輸送運行イメージ図



【運行形態】 自治会等組織による無償運送
 【運行日】 週4日(月・水・木・金)
 【目的地】 まちづくりセンター、郵便局、バス停、医療機関 等

step.1 課題

大屋地区では、地区内唯一の公共交通機関であったバス路線の廃止方針を受け、バスに代わる住民の移動手段の確保が大きな課題となっていました。一方、久利地区では、久利まちづくり推進協議会において、平成31年より地区単独での自治会輸送を開始していましたが、運転手や受付業務など将来的な担い手不足が懸念されていました。

step.2 計画

大屋まちづくり推進委員会が中心となり、アンケート調査の実施や、市の担当者・久利まちづくり推進協議会と1年余りの協議を重ねる中、久利地区で実施している自治会輸送の取組を両地区共同で運行することで、より効率的で利便性の高い仕組みにできないか、と考えました。これにより、大屋地区では路線バスに代わる移動手段の確保、久利地区では運行エリア拡大による利便性向上や車両維持経費の軽減につなげることを目指し、両地区での運用方法について話し合いを進めました。



step.3 トライ

共同運行をはじめるとにあたって、まずは3か月間の試行期間を設け、大屋地区の住民にも実際に利用してもらうことになりました。地区広報誌等での周知や利用希望者への説明会を行い、声かけにより30代の若手ドライバーも確保することができました。

step.4 カイゼン

試行期間中には、利用者やドライバーの意見をもとに、運行ルートや日時・予約方法などの改善を重ね、令和3年4月より両地区共同での自治会輸送の本格運行がスタートしました。現在、両地区あわせて約50名の利用者登録があり、主に医療機関への通院等での利用が広がっています。



next これから

今後も両地区での話し合いにより改善を図りながら、より効率的な運行システムの構築を目指しています。また将来的には、地域で持続可能な仕組みとするため、有償運送への移行と推進組織の法人化も見据え、検討を進めているところです。

取組 2

高齢者等の生活支援 草刈り・除雪等ボランティア「手ごし隊」

高齢者等の生活の困りごとを解消し、外出しやすい環境をつくることを目的に、草刈り・除雪等ボランティア組織として「手ごし隊」を結成。地区住民の要望に応じ、住宅周辺や耕作放棄地の草刈り、進入路の除雪などの支援を行います。現在約7名のボランティアで草刈りを中心に活動していますが、今後は地区内をはじめ、地区出身者、地域づくりに興味のある方に声をかけ、取組を広げていくこととしています。



Interview 地区のこれからと想い

久利地区



自分たちの組織は自分たちの責任で。地域の資源をどう活かし、地域にどう還元していくか

久利まちづくり推進協議会 会長
久利・大屋地区小さな拠点推進協議会 会長
森山 護(80歳)

65歳で帰ってきた故郷に店がないことに驚き、友人らと産直市を開いたのが、地域活動に関わるきっかけだった。平成24年には久利まちづくり推進協議会を立ち上げた。当初は異論もあったというが、地域のためにお金は無駄なく使うべきだと理解を求め、そこから「いいことはできるだけ早く、時代を読み、一步先を。自らが当事者となり、共に汗を流す」というスタンスで、高齢者サロンや自治会輸送などの取組を軌道にのせた。小さな拠点づくりモデル事業では、協働する大屋地区との相乗効果にも期待を寄せる。既に連携して実施している自治会輸送だけでなく、「各地区で取り組む特産品の販売など、地域で稼ぐ仕組みも取り入れながら、その収益を生活交通などの運営経費に充てていくことも考えていかないと地域は持続しない」と、今後の可能性も視野に入れている。「自分たちの組織は自分たちの責任で運営するべきだ。地域の資源をどう活かし、地域にどう還元していくか。…そのためにはお互いに地域のいいエネルギーを引き出すことが必要」と事業の進捗とこれからの地域のために変わらず一步先を見据えている。

大屋地区



あるものは久利、あるものは大屋で。お互いに一緒になって進めていく事業

大屋まちづくり推進委員会 会長
久利・大屋地区小さな拠点推進協議会 副会長
安藤 彰浩(73歳)

「以前から大屋地区では、地区の歴史文化を冊子にまとめたり、たけのこなどの特産加工品をふるさと小包にして送るなどの活動がありました。山間地に家々が点在する地域だが、そのぶんつながりは深い」と安藤さん。平成21年の大屋まちづくり推進委員会の立ち上げから、このような活動を続けていたが、唯一の公共交通であった路線バスが令和3年3月末に廃止されることが決まった。代替交通を模索する中、小さな拠点づくりモデル事業により久利地区で先行していた自治会輸送に加わることにした。「担い手確保の問題など大屋地区単独での仕組みの構築に頭を悩ませていたが、自治会輸送の共同運行により一年目とはいえ20人以上の利用登録につながった」と、手ごたえにも喜ぶ。当初は両地区で取り組むことのメリットや役割分担に疑問の声もあったが、「あるものは久利、あるものは大屋で、お互いに一緒になって進めていく事業」だと、住民の理解を求めた。「今後も、両地区の良いところを活かして、地域が自立して残っていけるような取組につなげていければ」と、協働して取り組む思いをのぞかせた。



今後の計画 Our Planning

1. 生活交通の確保

- 自治会輸送を有償運送へ移行
- 推進組織の法人化(稼ぐ仕組みとリンクした持続可能な組織づくり)

2. 生活支援の環境整備

- 地域住民との交流による子どもの居場所づくりと見守り
- 高齢者等への買い物支援サービスの実施
- 多世代交流・多機能拠点施設の整備

3. 助け合いネットワークの構築

- 防災意識の向上、災害時の避難・見守り体制の整備
- 高齢者等の生活支援(草刈り・除雪等)ボランティア「手ごし隊」の取組拡大
- 鳥獣害対策として、猟師の担い手の育成・組織化